

暗黒の力のイメージをめぐって

矢口以文

1. 初めに

神ヤーウエが族長やモーゼを通して歴史の中に入ってきた時、そこは文化的に空白なところではなかった。人々は神々を信じていた。

聖書の世界と接触していた文化はいくつもあるだろうが、ここではバビロニアの神話「エヌマ・エリシュ」(Enuma eliš) とウガリトのバール神話を取りあげ、その中に描かれている神々の戦いを見、次にそれを連想させる聖書の中の表現を調べ、最後に、英米詩の中にそのイメージを追いかけてみたい。

2. 神話の世界

(i) 「エヌマ・エリシュ」

これは推定によれば、紀元前2000年代の初期に文字にされた創造神話であるが、その中核は神々の戦いであり、三部から成ると言えよう。第一部は神々の誕生であり、第二部は神々の戦いであり、第三部は世界の秩序づけ、即ち世界の創造であり、その後の人間の創造である。

第一部について短く言えば、天も地もなかった大昔に、真水の神アプスーと塩水の神ティアマートがいて、この二神から神々が生まれ、それから次第にその数が増えていった。ティアマートは女神で、海に住む龍神である。

第二部は、ティアマートと彼女に味方する神々に対して、マルドゥクとその指揮下の神々が戦争をするという物語である。初めはティアマート側が優勢だったが、結局は、神々の中で最も強く、目の四つある美男のマルドゥクが勝利を得る。戦いの場面を英語訳で引用してみよう。

So they came together—Tiamat, and Marduk, Sage of the gods:

They advanced into conflict, they joined forces in battle.
He spread wide his net, the lord, and enveloped her,
The Evil Wind, the rearmost, unleashed in her face.

As she opened her mouth, Tiamat to devour him,
He made the Evil Wind to enter that she closed not her lips:
The Storm Winds, the furious, then filling her belly,
Her inwards became distended, she opened fully wide her mouth.

He shot therethrough an arrow, it pierced her stomach,
Clave through her bowels, tore into her womb:
Thereat he strangled her, made her life—breath ebb away,
Cast her body to the ground, standing over it (in triumph⁽²⁾).

このように彼らは顔を合わせた——ティアマートと神々の中の賢者マルドゥクとが。

彼らは前進して戦った、互いに力を合わせて敵と戦った。
主なるマルドゥクは網を広げてティアマートを包みこんだ、
一番背後の「悪い風」を彼女の顔めがけて解き放った。

ティアマートがマルドゥクを呑もうと口を開いた時に
「悪い風」をその中に吹きいれたから、彼女は唇を閉じることができなくなった。

怒りたける「嵐の風」が彼女の腹をふくらませた、
彼女の内側がふくらんで、口を大きく開いた所に

マルドゥクが矢を射ちこむと、それは胃を貫いた。
内臓を裂き、子宮を貫いた。
それから彼女を絞め殺し、生命の息を干かせた、
彼女の体を地面に投げ捨て、その上に立った。

このあとマルドゥクはティアマートの軍勢を打ち負かし、多くの神々

を捕虜にし、それからティアマートの体を二つに割って天と地を作り、敗軍の指揮をしていたキングウの血から人間を作った。

世界の中心にあるバビロニアのその中心に、ひときわ高くマルドックの神殿が建設され、そこから彼は下の世界を見守る。一年の終わりに、神々はその宮殿に集合し、王に敬意を表し、宴会が行なわれる。

(ii) バール神話

カナンのバール神話の場合には、主神は雷神のバールであり、退治される龍神はヤムである。しかしこの神話の場合には、バールとヤムの戦いのあと、もうひとつの戦いがある。死の神モトとの戦いである。

ガスターの推論によれば、バールとヤムの葛藤は九月後半から五月初期までの雨期に関わっており、モトとの葛藤は五月初期から九月後半までの乾期(3)に関わっている。

海の神ヤムを打ち負かしたあと、バールは勝利の宴会を催すが、その最中に、モトが反乱を起こすのではないかと心配になる。急いで使いの者を送り、モトに自分の領土の外に出ないように言うが、これを聞いたモトは激怒する。

恐れるモトをなだめるために、贈り物をとどけるのだが、うまくゆかない。最後にバール自身が死の国を訪れるのだが、モトの出した食事を食べて、生者の国に帰れなくなる。そのため、地上に雨が降らなくなり、旱魃が始まる。

バールを恋する女神のアナトがモトに復讐をして、バールはよみがえる。雨が降り、小川に蜜が流れ、大地に緑がもどる。バールは六年間王座につくが、七年目に、アナトに退治されたモトがよみがえり、バールと戦う。英語訳を引用してみよう。

They...like camels:

Mot's firm, Baal's firm.

They gore like buffaloes:

Mot's firm. Baal's firm.

They bite like snakes:

Mot's firm. Baal's firm.

They kick like chargers:
Mot falls. Baal falls.⁽⁴⁾

彼らはらくだのように...

モトは強い、パールは強い。

彼らは水牛のように角で突き合う。

モトは強い。パールは強い。

蛇のように噛み突き合う。

モトは強い。パールは強い。

軍馬のように蹴り合う。

モトが倒れる。パールが倒れる。

戦っている間に、太陽の神シャプシュが空からモトに降参するように叫ぶ。父神が自分の住み家の柱をぬいてしまうかもしれないと恐れたモトは、遂にパールに降参する。パールは晴れて王座につき、最後にアナトと結婚する。秩序がもたらされ、農作物が確保され、生命が世界に満ちる。

農耕によって生きてゆくものたちにとっての何よりの敵は、洪水と早魃だろう。農作物と秩序をもたらす神々が、洪水と早魃をもたらす神々を打ち破らなければ、彼らは生きてゆけない。彼らの神々が勝利をおさめるのを確実にするため、定期的に、このような神々の戦いの儀式を行う必要があったのだろう。

神々は自然現象の擬人化だったと、今は言うことができるかもしれないが、当時の人々はこのような自然の現象の中に神々の存在を感じていたのだろう。

3. 聖書の中で

(i) 旧約聖書

神々の戦い、主神の勝利、戴冠式のイメージは聖書の中にも多く見られる。少なくともそれを連想させる表象が使われていることがしばしばある。

ヤーウエと神々との戦いの表象は変形された姿で、出エジプト記の前

半にあるモーゼとパロとの葛藤の中に見られるし、その後のイスラエルと取り巻きの国々との戦いの中に感じられる。これらの戦いは天上におけるヤーウェと神々との戦いの、地上での反映であると解釈して良いだろう。イスラエルの民はそう解釈していたのだろう。主神のヤーウェが勝利するのは言うまでもない。これはイスラエルが勝利し、世界に秩序がもたらされることを意味するのだろう。

しかし以下においては、実際の戦争のイメージではなく、ヤーウェと龍神の戦い、ヤーウェと死の神との戦いのイメージを追って見よう。これらのイメージの中には、現実における敵との戦いも含まれているようだ。

龍神との戦いは次のように表現されている。

In that day the LORD with his sore and great and strong sword shall punish le-vi'-a-than the piercing serpent, even le-vi'-a-than that crooked serpent; and he shall slay the dragon that is in the sea. (Is. 27:1)

その日、主は賢く大いなる強いつるぎで逃げるへびレビヤタン、曲がりくねるへびレビヤタンを罰し、また海における龍を殺される(イザヤ27章1節)。

龍神に勝って、主神が王座について支配権を獲得するものを連想させるものの最も明らかなものの一つは詩篇93篇であるとガスターは述べている。⁽⁵⁾その解説によれば、この詩はヤーウェが王となり、威光の衣を着、宇宙の秩序を樹立した(1-2節)という声明で始まり、その後、ヤーウェは反乱を起こした大水を静めた(3-4節)と続き、最後の権威は永遠である(5節)ということで終わる。引用してみよう。

The LORD reigneth, he is clothed with majesty; the LORD is clothed with strength, *wherewith* he hath girded himself: the world also is stablished, that it cannot be moved.

Thy throne *is* established of old: thou *art* from everlasting.

The floods have lifted up, O LORD, the floods have lifted up
their voice; the floods lift up their waves.

The LORD on high *is* mightier than the noise of many waters,
yea, than the mighty waves of the sea.

Thy testimonies are very sure: holiness becometh thine house,
O LORD, forever.

主は王となり、
威光の衣をまとわれます。
主は衣をまとい、力をもって帯とされます。
まことに、世界は堅く立って、
動かされることはありません。
あなたの位はいにしえより堅く立ち、
あなたはとこしえよりいらせられます。
主よ、大水は声をあげました。
大水はその声をあげました。
大水はそのとどろく声をあげます。
主は高き所にいらせられて、
その勢いは多くの水のとどろきにまさり、
海の大波にまさって盛んです。
あなたのあかしはいとも確かです。
主よ、聖なる言葉はとこしえまでも
あなたの家にふさわしいのです。

他に詩篇29, 74, 89, 104, それに戴冠の詩篇と言われている96, 97, 98, ヨブ記第9章13節, ヨナ書などに、神話的な表現がつかわれていることをガスターは指摘している。

海の神である龍神を思わせる表現は、龍とかレピヤタン、ラハブといった明白なもの他に、海、荒れる海、水、大水、淵、暗黒、死の網、陰府、深い穴、波、深い泥、大滝等といった種類の表現がある。

死の神モトや死の国を連想させるものには箴言第1章12節、イザヤ書第5章13—14節、ハバクク第2章第5節等がある。イザヤ書のものを引

用してみよう。

Therefore my people are gone into captivity, because *they have* no knowledge: and their honourable men *are* famished and their multitude dried up with thirst.

Therefore hell hath enlarged herself, and opened her mouth without measure: and their glory, and their multitude, and their pomp, and he that rejoiceth, shall descend into it.

それゆえ、わが民は無知のために、とりこにせられ、
その尊き者は飢えて死に、
そのもろもろの民は、かわきによって衰えはてる。
また陰府はその欲望を大きくし、
その口を限りなく開き、
エルサレムの貴族、そのもろもろの民、
その群衆およびそのうちの喜びたのしめる者はみな、
その中に落ちこむ。

死の国は暗い所にあり、死の神は飽くことのない貧欲な胃を持っているというのは当時の信仰の一つであった。「尊き者は飢えて死に、そのもろもろの民は、かわきによって衰えはてる」は、バールが死の国にとらえられ、モトが地上にやってきた時に、大地がひでりで生命を失ったというバール神話の数行を連想させる。

聖書の中には死の国はヤーウェの権力の及ばない所だという考えもある。⁽⁷⁾例えばイザヤ書第38章18節では「陰府は、あなたに感謝することはできない。／死はあなたを賛美することはできない。／墓にくだる者は、／あなたのまことを望むことはできない」とある。

しかし旧約聖書には陰府もヤーウェの支配のもとにあるという信仰もある。例えば詩篇139やアモス書第9章2節にその思想が表現されている。

If I ascend up into heaven, thou *art* there: if I make my bed in hell,

behold, thou *art* there. (Ps. 139:8)

わたしが天にのぼっても、あなたはそこにおられます。
わたしが陰府に床を設けても、
あなたはそこにおられます (詩篇 139:8)。

(ii) 新約聖書

旧約聖書においてはヤーウェの主権がかなり確立したように見えるが、新約聖書には悪の神復権のイメージがある。例えばヨブ記で神のしもべであったはずのサタンが新約聖書では神とキリストに歯むかう存在に描かれている。

イエスはその公生涯の初めに、悪魔から試練をうける(マタイ 4:1-11 参照)。またイエスのお仕事のひとつは人々の中から悪霊どもを追い出すことだった(同書 9:32-38 参照)。そしてイエスはしもべの道をたどり、十字架につけられることで、悪魔と死を打ち破ったと書かれている。パウロの手紙を引用してみよう。

So when this corruptible shall have put on incorruption, and this mortal shall have put on immortality, then shall be brought to pass the saying that is written, Death is swallowed up in victory,

O death, where is thy sting? O grave, where is thy victory? (1 Corinthians 15: 54-55)

この朽ちるものが朽ちないものを着、この死ぬものが死なないものを着るとき、聖書に書いてある言葉が成就するのである。「死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか」(コリント人への第1の手紙15: 54-55)。

新約聖書の信仰によれば、神に反抗する勢力はこのようにキリストの死によって打ち破られたが、最終的に、完全に打ち滅ぼされるのは、キリストの再臨する世の終わりの時である。現在は、「すでに」と「いまだ」との間にある中間の時期である。敗れた悪の勢力は世の終わりまで、し

ばらくはばっこするだろう。⁽⁸⁾

黙示録の12章と13章には世の終わりに行われる戦いを暗示するイメージがある。第12章は天上での戦いを扱っている。キリストの軍勢であるミカエルとその部下たちが龍と戦う情景は次のようである。

And there was war in heaven: Michael and his angels fought against the dragon; and the dragon fought and his angels.

And prevailed not; neither was their place found any more in heaven.

And the great dragon was cast out, that old serpent, called the Devil, and Satan, which deceiveth the whole world: he was cast out into the earth, and his angels were cast out with him.(12:7-9)

さて、天では戦いが起こった。ミカエルとその御使たちとが、龍と戦ったのである。龍もその使たちも応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らのおる所がなくなった。この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落とされ、その使たちも、もろともに投げ落とされた(12:7-9)。

第13章は地上での戦いである、最初にキリストに敵対するものは、海から出てきた獣であり、天から追放された龍から権威を与えられている。

And I stood upon the sand of the sea, and saw a beast rise up out of the sea, having seven heads and ten horns, and upon his horns ten crowns, and upon his heads the name of blasphemy.

And the beast which I saw was like unto a leopard, and his feet were *the feet* of a bear and his mouth as the mouth of a lion: and the dragon gave him his power, and his seat, and great authority.

And I saw one of his heads as it were wounded to death; and his deadly wound was healed: and all the world wondered after the beast.

And they worshiped the dragon which gave power unto the

beast: and they worshiped the beast, saying, Who is like unto the beast? who is able to make war with him?(13:1-4)

わたしはまた、一匹の獣が海から上って来るのを見た。それには角が十本、頭が七つあり、それらの角には十の冠があつて、頭には神を汚す名がついていた。わたしの見たこの獣はひょうに似ており、その足はくまの足のようで、その口はししの口のものであつた。龍は自分の力と位と大いなる権威とを、この獣に与えた。その頭の一つが、死ぬほどの傷をうけたが、その致命的な傷もなおってしまった。そこで全地の人々は驚きおそれて、その獣に従ひ、また、龍がその権威を獣にあたえたので、人々は龍を拝み、さらに、その獣を拝んで言った。「だが、この獣に匹敵し得ようか。だが、これと戦うことができようか」(13:1-4)。

この獣は神に反逆する政治権力を表しており、具体的に当時のローマ帝国を指すと解釈⁽⁹⁾されている。

第二の獣は地の下から出てきたもので、次のように描かれている。

And I beheld another beast coming up out of the earth; and he had two horns like a lamb, and he spake as a dragon.

And he exerciseth all the power of the first beast before him and causeth the earth and them which dwell therein to worship the first beast, whose deadly wound was healed.

And he doeth great wonders, so that he maketh fire come down from heaven on the earth in the sight of men,

And deceiveth them that dwell on the earth by *the means of* those miracles which he had power to do in the sight of the beast; saying to them that dwell on the earth, that they should make an image to the beast, which had the wound by a sword and did live. (13:11-14)

わたしはまた、ほかの獣が地から上って来るのを見た。それには小

羊のような角があって、龍のように物を言った。そして、先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷がいやされた先の獣を拝ませた。また、大いなるしるしを行って、人々の前で火を天から地に降らせることさえした。さらに、先の獣の前で行うのを許されたしるしで、地に住む人々を惑わし、かつ、つるぎの傷をうけてもなお生きている先の獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた (13:11-14)。

これは神に反逆する政治権力を支える宗教的権威と考えられる。具体的にはローマ帝国を支えたローマの宗教勢力だと解釈されている⁽¹⁰⁾。

このように暗黒の諸勢力が世の終わりに表われてくるが、結局はキリストに滅ぼされ、新しい時代、新しいイスラエルが始まるという希望で、黙示録は終わっている。

4. 英米詩において

新約聖書の後、入念で、興味深い悪魔論が展開された。例えば教父たち、マニ教徒、グノーシス主義者、二元論者などの著書や、アウグスティヌスの著書がある。しかし私たちはそれにはふれないで、英文学の世界に入ってゆきたい。

神々の戦いから成る農耕儀式はヨーロッパの世界にいろいろ形を変えて残っていることはよく指摘されている。ガスターはパークシャーのある村で演じられていた仮面劇⁽¹²⁾を紹介している。この劇ではジョージ王とトルコの騎士との戦いが中心になっている。初めは厳粛な儀式だったが違いないが、今では笑いを誘う見せ物になってしまっている。

前口上のあとでこの劇の中心である戦いの儀式が展開する。主役はジョージ王だ。入場してきた彼は次のように言う。

K. G. —“Here comes I, King George, the valiant man,
With naked sword and spear in hand.
I fought the fiery dragon and brought him to slaughter,
And by these means I won the King of Egypt's daugh-

ter.

And what mortal man dare to stand
Before me with my sword in hand?
I'll slay him and cut him as small as flies,
And send him to Jamaica to make mince pies."

ジョージ王—「私は勇敢なジョージ王だ。

今 抜き身と槍を持ってやってきた。
かつて火を噴く龍と戦って退治し、
エジプト王の姫を手にいれたのは私だ。
武器を持って私と
戦おうとしているのは一体誰か？
そいつを殺してはえのように細かく切り刻み
ジャマイカに送って、こまぎれ肉のパイにしてしまおう。」

龍を殺すとか、殺して肉を切り刻むといった表現は神々の物語を思わせるが、こまぎれ肉のパイにするというあたりは、かなりの変形である。そしてここでは龍神はトルコの騎士というように歴史化されている。この両者は戦うが、倒されるのはジョージ王だ。医師が呼ばれて、死んだ王に手当てが施される。死んだジョージ王の歯が悪いということになり、ペンチで悪い歯が抜かれる。そうするとジョージ王がよみがえる。最後に、この物語を語る人物が、見物人に箱を回してお金を入れて下さいと頼む。

ガスターによれば、この仮面劇は農耕儀式の最後の形で、やがてそれは劇的構造を失って、単なる文学的、詩的な作品に変形してしまった。

英詩に眼をむけると、先ず思い浮かぶのは、*Beowulf* (ベオオウルフ) だろう。また、Edmund Spenser の書いた *The Faerie Queene* (『神仙女王』) や John Milton の *Paradise Lost* (『失樂園』) の中にも、神々の戦いが姿形を変えて登場している。しかし以下においては、これらの長詩以外の作品に目をむけたい。

英詩では、「死」を死神として、または人格を持った存在として描いていることが少なくない。その場合、「死」が擬人化されていると考えられ

ることもあるし、また「死」が実際に死を司る神的存在として信じられていると考えられることもある。この両者の境界線があいまいなこともある。

繰り返すが、パウロの表現によると、キリストは十字架の死により、「死」を打ち破った。キリスト者はこのキリストとひとつになることで、「死」に打ち勝つのである。この新約聖書の信仰が、キリスト教詩人である英米の詩人たちに影響を与えた。

前述もしたパウロの表現は“O death, where is thy sting? O grave, where is thy victory?” だが、これが、特に詩人たちにこだましている。George Herbert は“A Dialogue-Anthème. *Christian Death*”という詩の中で、「死」とキリスト者の対話を次のように描いている。

Chr. ALAS, poore Death, where is thy glorie?
Where is thy famous force, thy ancient sting?
Dea. Alas poore mortall, void of storie,
Go spell and reade how I have kill'd thy King.
Chr. Poore Death! and who was hurt thereby?
Thy curse being laid on him, makes thee accurst.
Dea. Let losers talk: yet thou shalt die;
These arms shall crush thee.
Chr. Spare not, do thy worst.
I shall be one day better then before:
Thou so much worse, that thou shalt be no more.⁽¹³⁾

キリスト者：ああ、哀れな「死」よ、お前の栄光はどこにあるのか？
お前の評判の力は、昔ながらの針はどこにあるのか？

死：ああ、哀れな人間よ、語るもののないものよ、
行って読んでこい、私がどのようにお前の王を殺したかを。

キリスト者：哀れな「死」よ！それによって傷ついたのは誰か？
お前の呪いはお前の上におかれている、お前は呪われている。

- 死： 負け犬は良く話すものだ。お前を殺してやる。
この腕でお前をつぶしてやろう。
- キリスト者： 手かげんしないで、全力でかかってこい。
私は必ず前より良くなるだろう。
お前はそれだけ悪くなり、存在さえしなくなるだろう。

「死」はキリスト者の王であるキリストを十字架につけたと誇るが、それに対してキリスト者は、そうすることで滅ぶことになるのは「死」の方だと主張する。「死」が脅かしても、キリスト者は悠然たる態度を取っている。パウロの表現が、二行目の“Where is thy famous force, thy ancient sting?”の中に感じられるのは言うまでもないことである。

ほとんど同時代の先輩詩人である John Donne が “Death, be not proud”⁽¹⁴⁾ で、神を信じることで永生が与えられることを表現し、また、Shakespeare は “Sonnet 146”⁽¹⁵⁾ で、天に宝を積むことで「死」を克服するという内容の詩を書いている。

キリスト教詩人たちの「死」に対する態度は、小さな違いはあっても大体このようなものであろう。“Sting”のイメージについて付言すれば、Alexander Pope が “The Dying Christian To His Soul”⁽¹⁶⁾ の最終連で、
“The World recedes; it disappears! / Heaven opens my eyes! my ears / With sounds seraphic ring! / Lend, lend your wings! I mount! I fly! / O Grave! Where is thy victory? / O death! Where is thy sting?”

(「世界は退く。消える！／天が私の目の上で開く！耳に／天使の音が響く！／貸して下さい、翼を貸して下さい！私は上る！私は飛ぶ！／おお、墓よ！お前の勝利は、どこにあるのか？／ああ、死よ、お前のとげはどこにあるのか？」) と表現している。

Dragon または Serpent の場合はどうだろうか。Andrew Marvel が “The Coronet”⁽¹⁷⁾ の中で、Serpent を描いている。「私」は永い間、キリストの頭に茨の冠をかぶせてきたが、今その罪を贖うため、花の冠を編もうとする。

And now, when I have summ'd up all my store,
Thinking (so I myself deceive)

So rich a chaplet thence to weave
As never yet the King of Glory wore,
Alas! I find the Serpent old,
That, twining in his speckled breast
About the flowers disguis'd, does fold,
With wreaths of fame and interest.
Ah, foolish man, that would'st debase with them
And mortal glory, Heaven's diadem!
But Thou who only could'st the Serpent tame,
Either his slipp'ry knots at once untie,
And disentangle all his winding snare;

そして今、摘み取ったものを集めて、
栄光の王もかつて飾ったことのない
素晴らしい冠を
編もうと思う時（そのように自分を欺くのだ）、
ああ 昔ながらの蛇を見つけるのだ、
ぶちのある胸をし、姿を変えて
花にまきつき、
名誉と好奇心の花輪を抱いている。
ああ 愚かな自分よ、そんな花輪と
はかない栄華で 天の王冠をいやしめるとは！
蛇を従わせたあなただけが
ぬらぬらの結び目をほどき、
巻きつくわなを解きはなつ。

この詩では、蛇は宇宙的な戦いをまきおこすものとしてだけでなく、人間の中におごり高ぶりを引きおこし、名声や私欲で誘惑して、神から引きはなすものとして描かれている。この蛇の呪縛から開放するのがキリスト(King of Glory)である。

Marvelにはまた“Bermudas”⁽¹⁸⁾という詩がある。迫害を受けた清教徒たちの、船の上で歌う歌が主要な内容だが、その中に“What should we do

but sing His praise / That led us through the watery maze / Where
 He the huge sea-monsters wracks, / That lift the deep upon their
 backs, / Unto an isle so long unknown, / And yet far kinder than our
 own?" (「ただ主を讃える歌を歌おう／主は私たちを導いて海の迷路を通りぬけ／深淵を背中にかつぎあげる／巨大な怪獣たちを滅ぼして／誰も知らない島に／祖国より遙かに優しい島に連れてきてくれたから」という行がある。ここの“sea-monsters”は鯨であると言われている。しかし同時に彼らの信仰の邪魔をする悪魔的力をも連想させる。神はそれを打ちくちだいて、清教徒たちを楽園へ導いてくれたという思いが込められているようだ。

Dragon や serpent の場合にはその姿形が比較的はっきりしている。死についても、個人差はあるが、ある程度の確立した image ができあがっているようである。例えば「死」の姿について、現代の若者が次のように述べているが、これは矮少化されたものの例かもしれない。⁽¹⁹⁾

I picture Death as being fairly tall, having clearly cut features. His nose is straight and his eyes sparkle. He is a little on the slim side though looks fairly powerful. He has a very dark goatee coming to a point, black hair which is in need of a haircut. He is wearing a dark suit. He also has a light complexion. I see Death right now almost in the same way as the devil.

Death is a quiet person and kind of scary. He does not say much but is very sharp and it is almost impossible to outsmart him. Although you would like to stay away from him, there's something about him that kind of draws you to him. You like him and fear him at the same time. I picture Death as being millions of years but only looking about 40.

私の想像によれば、「死」はかなり背が高く、頬がこけている。鼻筋が通っていて、目はきらきらしている。かなり強そうには見えるが、少しほっそりしている。すごく黒いやぎひげは先端がとがっていて、黒い髪はもしやもしやして長い。黒い服を着ている。顔色は白み

ががっている。「死」は悪魔とほとんど同じように見える。

「死」は静かな男だが、一寸恐ろしい。あまり物を言わないが、大変に頭が良くて、出しぬくことはほとんど不可能だ。彼から離れていたいと思っても、どこか人をひきつける所がある。好ましいが、同時に恐ろしい。「死」は何百万才だと思いが、40才位にしか見えない。

「死」も「龍」も、キリストを信じる時に、打ち負かすことができるというのが、伝統的なキリスト教詩人たちの立場であることを見てきたが、「死」は今や神のしもべであるという詩人さえも現代にいる。例えば黒人詩人James Weldon Johnsonが、今世紀の前半に“Go Down Death”⁽²⁰⁾（「行け、死よ」）という詩を書いている。

この詩で“Death”は神のしもべである。神はこのしもべを呼び出して、死の床で苦しむ女性を連れてくるようにと命じる。例えば第5連は次のようだ。

And God said: GO down, Death, go down,
Go down to Savannah, Georgia,
Down in Yamacraw,
And find Sister Caroline.
She's borne the burden and heat of the day,
She's labored long in my vineyard,
And she's tired—
She's weary—
Go down, Death, and bring her to me.

そして神は言った、「行け、死よ、行け、
ジョージアのサバンナに行け、
ヤマクローに行け、
キャロラインという女性がいるから。
彼女は一日の重荷と暑さをこらえている、
ぶどう園で長く働いた、
疲れている——

へとへとになっている——
死よ、行って私の所へ連れてこい」

「死」は命じられたように、馬に乗って出かけ、この女性をイエスの所に連れてくる。イエスは彼女を優しく胸に休ませる。

しかしこの詩はむしろ例外で、近代から現代にかけて、死や龍は御し難い不気味な力をもった暗黒の存在としてとらえられ、戦争や人間疎外、不正、破滅をもたらすものとして詩の中に登場する。

前世紀の終わり頃に米国の詩人 Stephen Crane に“War is Kind”⁽²¹⁾（「戦争は優しい」）という詩があるが、その中で戦争を引きおこすのは死の神だと言い、大量の死者を見て喜ぶその神を、皮肉一杯に賛美している。

例えば第二連の後半で、“Great is the Battle God, great, and his kingdom - / a field where a thousand corpses lie.”（「戦争の神は偉大だ、偉大だ、その王国は—／数千の死体が横たわっている戦場」）と書いている。

このような立場を更におし進めたのが第一次大戦を経験した英国の詩人たちである。その典型的なのが Wilfred Owen であり、Siegfried Sasson⁽²²⁾ である。Owen の“The Next War”の第一連を引用してみよう。

Out there, we've walked quite friendly up to Death;
Sat down and eaten with him, cool and bland,—
pardon'd his spilling mess-tins in our hand.
We've sniffed the green thick odour of his breath,—
Our eyes wept, but our courage didn't writhe.
He's spat at us with bullets and he's coughed
Shrapnel. We chorused when he sang aloft;
We whistled while he shaved us with his scythe.

そこで僕らは親しげに「死」に近づいた。

腰を下ろし、一緒に食べた、冷静に、物柔らかかに—
彼は携帯用食器から僕らの手に食物をこぼしたが、それをゆるした。

彼の濃い緑色の匂いのする息をかいた—
僕らの目は涙を流したが、勇気は苦しまなかった。
彼は僕らに弾丸のつばを吐き、榴散弾の
せきをした。彼が声高に歌う時、僕らは合唱した。
鎌で僕らを刈りこむ時、僕らは口笛を吹いた。

そして Sassoon の“Make Them Forget”（「彼らに忘れさせて下さい」）
にははっきり、戦争を目論むのは‘The Prince of Darkness’だと表現さ
れている。⁽²³⁾

I saw the Prince of Darkness, with his Staff,
Standing bare-headed by the Cenotaph:
Unostentatious and respectful, there
He stood, and offered up the following prayer,
“Make them forget, O Lord, what this Memorial
Means; their discredited ideas revive;
Breed new belief that War is purgatorial
proof of the pride and power of being alive:
Men’s biologic urge to readjust
The Map of Europe, Lord of Hosts, increase;
Lift up their hearts in large destructive lust;
And crown their heads with blind vendictive Peace!”
The Prince of Darkness to the Cenotaph
Bowed. As he walked away I heard him laugh.

暗黒の王が部下を従えて 帽子を取って
戦没者記念碑のそばに立っているのを見た。
けばけばしい服装をせず 丁重に
立って、次のような祈りを捧げた、
「おお主よ、この記念碑の意味する所を
彼らに忘れさせてください。彼らが信じなくなった考えをよ
みがえらせて下さい。

戦争は生きることの誇りと力の

罪滅ぼしの証拠であるという新しい信仰を育ててください。

ヨーロッパの地図を再編成しようという

人間の生物的衝動を強めてください、万軍の主よ。

もっと大きく破壊したいという欲望を彼らの中におこしてください。

彼らの頭に見境のない復讐心で燃える平和の冠をかぶせてく
ださい。！」

暗黒の王は記念碑に頭を

下げた。歩き去る時に、彼の笑うのが聞こえた。

この二人共、英国の行う戦争は神の導きによる正義の戦争であるという伝統的な立場に立っていない。戦争する国家のうしろに「死」の力が働いていることを感じている。これは必ずしも新しい傾向ではないかもしれない。例えば前述もした John Donne は“Death, be not proud”の中で“Death”は poison, war, sickness と同居していると書いている。

そして、近代から現代にかけて、戦争というような地球規模の破壊を体験した詩人たちにとっては、「死」は巨大な暗黒の力で、制御できないほど強力である。彼らは不安と恐れをもってそれを描く。

William Blake が“London”で London の人々の惨めな状態を描いた。いわば「死」の支配する都市の風景である。第一次大戦後の London を T. S. Eliot は“The Waste Land”でボードレールをもじりながら、“Unreal City, / Under the brown fog of a winter dawn, / A crowd flowed over London Bridge, so many, / I had not thought death had undone so many.”（「幻想の都市、／冬の明け方、褐色の霧の中を／群衆がロンドン橋の上に流れた、そんなにも大勢を、／死があればほどの大勢を滅ぼしたとは知らなかった」）という有名な数行を書いた。⁽²⁴⁾「死」に支配されている20世紀の救いのない都市社会を描いている。

その後、Eliot とは信仰の立場を異にする Allen Ginsberg が“Howel”⁽²⁵⁾の中で、Moloch に言及している。

Moloch whose mind is pure machinery! Moloch whose blood is
running money! Moloch whose fingers are ten armies!

Moloch whose breast is a carnival dynamo!

Moloch whose ears is a smoking tomb!

モーラック、お前の精神は単なる機械だ！モーラック、お前の
血は流れる金だ！モーラック、お前の指は十の軍隊だ！
モーラック、お前の胸は人食い人種のダイナモだ！
モーラック、お前の耳は煙を吐く墓だ！

Moloch はもともと人間のいけにえを要求する神だが、この詩では戦争、機械的すぎる文明、物質的すぎる文明等のうしろに働くものである。

「黙示録」によれば、世の終わりに、暗黒の勢力があらわれてくる。第6章には「小羊が第四の封印を解いた時、第四の生き物が『きたれ』という声を聞いた。そこで見ていると、見よ、青白い馬が出てきた。そしてそれに乗っている者の名は『死』と言ひ、それに黄泉が従っていた。彼らには地の四分の一を支配する権威、および、つるぎと、ききんと、死と、地の獣らとによって人を殺す権威とが与えられた」(7-8)とある。また前に引用したように、12章と13章には、龍の出現のことが書かれている。これらを連想させる詩が書かれている。そのひとつの典型は W.B Yeats の“The Second Coming”⁽²⁶⁾ であろう。

Surely some revelation is at hand;
Surely the Second Coming is at hand.
The Second Coming! Hardly are those words out
When a vast image out of *Spiritus Mundi*
Troubles my sight: somewhere in sands of the desert
A shape with lion body and the head of a man,
A gaze blank and pitiless as the sun,
Is moving its slow thighs, while all about it
Reel shadows of the indignant desert birds.
The darkness drops again; but now I know
That twenty centuries of sleep
Were vexed to nightmare by a rocking cradle,

And what rough beast, its hour come round at last,
Slouches towards Bethlehem to be born?

確かにある黙示の時が迫っている。
確かにある再臨の時が迫っている。
再臨！この言葉が話されるやいなや
「この世の霊」からうまれた巨大なイメージが
私の目を悩ませる。どこかの砂漠の砂に
ライオンの体をし、人間の頭をしたものが
太陽のように無表情で、非情な目をし、
ゆったりふとももを動かしている—その周りには
怒れる砂漠の鳥たちの円を描いている影がある。
暗闇が再び落ちる。しかし今私は
石のように眠っていた20の世紀が
ゆりかごに悩まされて悪魔を生んだことを知った。
時が遂に到来した今、どんな荒々しい獣が
ベツレヘムの方に前かがみになって生まれようとしているのか？

世界の終わりに、キリストの再臨があると信じられているが、その前に悪魔が出現するという黙示録の教えを背景に読むとイエーツの意図が見えてくる。⁽²⁷⁾

20世紀後半で、W. S. Merwin が⁽²⁸⁾ 'Leviathan' を書いている。難破物の漂う荒海の中を泳ぐ巨大な暗黒の陸地のような姿を描いたあとで、“Froth at flanks seething soothes to stillness,/ Waits; with one eye he watches/ Dark of night sinking last, with one eye dayrise/ As at first over foaming pastures”（「脇腹のあわが騒ぎ立ちながら落ち着いて静かになると／彼は待つ、一方の目で最後に沈む／夜の暗闇を見つめ、他方の目で／初めのようにあわ立つ牧場の上のにぼる夜明けをみつめる」）と書き、創造主に不満を持つレビヤタンは世が新しく始まるのを待つ（“And he waits for the world to begin.”）という描写で終わる。次の時代こそ、自分の望むようなものであると、この不気味な、暗黒の力を思わせる存在が願っているのだと感じさせる。⁽²⁹⁾

黙示録の「死」また「獣」を扱って、それらを、現代社会の中で特定しようとしたのが Margaret Walker である。“Prophets For a New Day”（「新しい時代の預言者」）の第3部は次のよう⁽³⁰⁾だ。

A beast is among us.
His mark is on the land.
His horns and his hands and his lips are gory with our blood
He is War and Famine and Pestilence
He is Death and Destruction and Trouble
And he walks in our houses at noonday
And devours our defenders at midnight.
He is the demon who drives us with whips of fear
And in his cowardice
He cries out against liberty
He cries out against humanity
Against all dignity of green valleys and high hills
Against clean winds blowing through our living;
Against the broken bodies of our brothers.
He has crushed them with a stone.
He drinks our tears for water
And he drinks our blood for wine;
He eats our flesh like a ravenous lion
And he drives us out of the city
To be stabbed on a lonely hill.

獣が私たちの中にいる。
彼のしるしが大地にある。
彼の角と手と唇は私たちの血で塗られている。
彼は戦争だ ききんだ 疫病だ、
彼は死だ破壊だ災害だ、
彼は日中私たちの家の中を歩き、
夜には私たちを擁護する者たちをむさぼり食う。

彼は私たちを恐怖のむちで追う悪魔だ、
彼は臆病だから
自由に反対して叫ぶ、
人間に反対して叫ぶ、
緑の谷や高い山の威厳に反対して、
私たちの生活に吹くきれいな風に反対して叫ぶ。
私たちの兄弟の破壊された体にむかって叫ぶ。
かれは兄弟を石でください。
彼は水のかわりに私たちの涙を飲む、
酒のかわりに私たちの血を飲む。
私たちの肉体をどん欲なライオンのように食う、
彼は私たちを都市から追い出して
淋しい丘の上で突き刺す。

黒人詩人たちは自分たちをエジプトにとらわれていたイスラエルとしてとらえ、今こそそのエジプトである白人の暴虐な支配から解放される時だとうたいがちだが、この詩の前半のイメージは出エジプト記よりはむしろ、キリストにおいて成就したと信じられているイザヤ書40章のバビロン捕囚からの解放の預言か、また抑圧された人々に自由を与えるヨベルの年のイメージを思いおこさせる。そしてその第3部では、獣（即ち悪魔）は人間をおしつぶす巨大な社会悪としてとらえられている。戦争、ききん、疾病、死、破壊、災害であると表現されている。意味する所は、それらをもたらす、陰の暗黒の力なのだろう。

最後の二行は「私たち」の受難を意味するが、同時に、ゴルゴタの丘で突き刺されて殺されたキリストを暗示する。キリストが十字架につけられることで勝利をおさめたように、「私たち」もこのキリストの生と死とひとつになることで、勝利を与えられることを示唆する。社会を支配してきた暗黒の力が、かつてのように、今やキリストに最終的に打ち破られる。私たちはそれを言葉と行動で告げ知らされるという内容が、三部にわたって表現されている。

5. 終わりに

以上において、暗黒の力を暗示する「龍」、「死」及び「獣」のイメージを初めは神話の中に見、それから聖書をたどり、最後には英米詩の中に追ってみた。それぞれの中において、主として人間の生命をおびやかす危険な、超自然的な存在としてとらえられている。

新約聖書や初期の英文学においては、キリストを信じることによって、これらの諸勢力に打ち勝つことができると信じられていた。しかし近代や現代に入ると、少数の例外を除いて、多くの詩人たちはこの暗黒の力に不気味さを覚えて、不安に襲われている。国家や大企業のうしろに働き、戦争や不正、過度の物質文明をひきおこしているのが、このような存在であると感じている。

20世紀の中頃に、オランダの神学者 H. Berkhof が *Christ and the Power* という本の中で、新約聖書の「もろもろの天使」とか「力」と呼ばれているものを研究し、それらは政治や経済組織の中にも働いて、この世に悲惨をもたらすものでもあると信じられていた、と発表している⁽³¹⁾。宇宙的な働きをする暗黒な力に対する新約聖書の洞察はまさしく現代的である。

これらの力を打ち破ることができるだろうか。ある詩人たちはそれはとうてい打ち破ることのできない、恐ろしいものであると感じている。しかしまた別の詩人たちは、キリストに従うことによって、この恐ろしい力を支配することができると思っている。この立場は新約聖書の信仰につながるものであるとは言うまでもない。

[注]

- (1) J. B. Pritchard(ed.), *Ancient Near Eastern Text* (Princeton Uni. Press, 1955), p.60.以下 *ANET* と略す
- (2) D. Winton Thomas(ed.), *Documents from Old Testament Times*, (Harper&Row, 1961), pp.9-10.尚、原語からの日本語訳は『古代オリエント集 I』(筑摩書房) 121-122ページ参照。
- (3) T. H. Gaster, *Thespis* (Doubleday&Company, 1961)p.126.
- (4) *ANET* p.141.
- (5) Gaster, p.442 以降参照

- (6) Gaster, pp.205-207.
- (7) The Interpreter's Dictionary of The Bible A-D(Abingdon, 1962), p.803.以下 I. D. B. と略す
- (8) I. D. B. E-G, p.139 の“Eschatology”の項目を参照
- (9) I. D. B. A-D, pp.368 -369 の“Beast”の項目を参照
- (10) Loc. Cit.
- (11) このあたりについては, J. B. Russell の詳細な研究がある。例えば The Prince of Darkness(Cornell, 1988)を参照。他の作品については野村美紀子によるほん訳書がある。
- (12) Gaster, pp. 436 -439.
- (13) Poems of George Herbert (Oxford 1969), p.160.
- (14) D. J. Enright(ed), The Oxford Book of Death (Oxford 1983), p.19.
- (15) Shakespeare's Sonnet (Tsurumi Shoten, 1971), p.75
- (16) Masterpieces of Religious Verse (Harper&Row, 1948), p.575
- (17) Poems and Letters of Andrew Marvel vol.1 (Oxford, 1971), p.14.
- (18) Ibid., pp.17-18.
- (19) The Oxford Book of Death, pp.16-17.
- (20) Masterpieces, pp.592-593
- (21) J. S. Stallworthy(ed.),The Oxford book of War Poetry (Oxford, 1984), pp.131-132.
- (22) Masterpiece, p.543.
- (23) The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot (Faber&Faber, 1969), pp.62-63.
- (24) The American Tradition in Literature vol.2 (Norton&Company, 1974), pp.1722-1731.
- (25) Collected Poems of W. B. Yeats (MacMillan, 1970), p.210.
- (26) M. C. Colcutt&K.Kamijima(ed.),Modern English Poetry (Hokuseido, 1970), p.40 参照
- (27) D. Hall(ed.),Contemporary American Poetry (Penguin, 1971) pp. 198-199
- (28) 徳永暢三『アメリカ現代詩と無』(英潮社新社, 1990), 146ページ以降参照
- (29) The Bible as/in Literature (Scott, Foresman& Company, 1972), pp. 211-212.
- (30) H. Berkhof, Christ and Power (tr. by J. H. Yoder, Herald Press,

1962), 特に Chapter 2 を参照

尚, Bible については, Authorized King James Version (Oxford) と『聖書』
(日本聖書協会) を使った。